

フォーラム・登山用具の新知识 選び方と使い方

科学委員会・藤本慶光



2000 年 (平成 12 年)
3 月号 (No. 658)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

目次

フォーラム・登山用具の新知识

選び方と使い方	1
中国登山協会代表団の歓迎会	4
ネパールに記念事業	4
アルパタプロジェクト募金	4
海外の山・青年は荒野をめざす	5
報告	

集委会・志賀高原スキー懇親会	6
三水会・新春山行	6
医療委・医療協力の現場から	6
支部だより・秋田支部	7
東西南北	

古い写真について	8
田口二郎氏の『山の生涯』とアイガーヴァントをめぐる	8
「ミレニアム」の白い山々	10
ローゼンラウイの宿帳	10
西部コンロンの秘境に行く	11
榎有恒の呼び名で悩む『山』	
編集長—他山の石	12
ウェストンと二冊の本	13
図書紹介	14

『自然にあそぶ心』『小西さんちの家族登山』『遥かなり秘境 可西里』『砂に埋もれたホータンの廃墟』『THE ANDES』『BERG 2000』

「山岳写真展」の作品募集	16
新入会員・図書受入報告	16
INFORMATION・ルーム日誌	17
会務報告	18
さんけんだより	18

▶ 日本山岳会事務局 (含図書室) 取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時



問題提起をする大蔵喜福委員 (左) とアウトドア・アドバイザーの越谷英雄氏 (右)

日本山岳会の科学委員会は、毎年会員および一般登山者を対象にして、山に関する各種の科学的なテーマに基づいてシンポジウムを開催している。平成十一年度は「登山用具の新知识・選び方と使い方」と題して、平成十一年十一月二十七日に明治大学大学院講堂で、二人の講師を招きフォーラムを実施した。

最初に科学委員会の森担当理事が「十年程前に雨具に関するシンポジウムを開催したが、専門家による説明が科学的でありすぎて素人には難しすぎるというご指摘があり、その反省に基づいて今回は皆さんの関心の深い登山用具について、登山そのものをよく理解しておられる方にわかりやすいお話をしたい」と話した。皆さんに十分理解していただけると期待している」と挨拶。

フォーラムは、最初に科学委員会

のメンバー大蔵喜福氏が問題提起を行い、それを受けてICJ石井スポーツの越谷英雄氏が登山用具について、ウェア (肌着と外着)、靴、ザック・ストックその他、の三部構成で具体的な話をされた。その間、大蔵氏も使用者の立場からいろいろなコメントを出され、会場からも多くの質問が寄せられた。

■問題提起

大蔵氏は、ヒマラヤの高峰に数多く挑まれた豊富な経験を持ち、この十年アラスカ・マッキンリーで高所気象観測をしてこられた。今回のフォーラムに当たって「中高年登山者の現状」と題する長文を寄せられ、それに基づいて以下の話をされた。

「十年前に比べて登山人口は二倍になっただけで、中高年登山者の数は三倍にもなっただけで大きなウェイト

を占める。そうした中高年登山者が安全で楽しい登山をするために必要なのは、科学的な目を持つことである。山登りをするということは日常とは違った環境に身をおくことだが、下界で普通に環境を自分で制御できる能力が、高い山では衰えて、自分の危機管理能力が落ちることを十分に認識すべきである。

若い頃は体力にまかせて可能であったことが、中高年になるとできなくなっている。それを補うのが科学する心であり、目である。それは自己の体力、技量をよく知り、自分の持つ装備が現在の状況で危機に耐えられるものであるかどうかをきちんと把握できる力である。

登山は本来自分がやりたいことをやり、楽しむためにやることであって、そのために余力を残さなければならぬ。それを可能にするのが快適なウエアであり、軽くて小さな荷物である。したがって装備は機能の優れたよいものを求め、大事に長持ちさせるべきで、自分の持っている装備の機能を素材を含めて十分に認識していなければならない。

自分の体力、危機管理能力を十分に把握できない人は、山登りをするべきではない。そうした人が山登りを志すならば優秀なガイドを雇うとか、優れた装備をそろえるとかのサ

ポートを得ることが肝要であろう」

■登山用具の新知識・選び方

問題提起を受けて、きわめて具体的に登山用具について話をされた越谷英雄氏は、ICI石井スポーツの第二営業部長として、多くの登山用具を販売している。ご自身の豊富な登山経験を踏まえて、各種報道機関の探検や登山番組制作のためのメンバーに的確なアドバイスを積極的行っているアウトドア・アドバイザーである。

一、基本的なウエアの最先端の素材
快適な登山を安全に行うために、身体に着けるウエアはきわめて重要な役割を持っている。これらのウエアをつくるために、科学的によく考えられた素材が開発されており、その特性を十分に認識して使用すべきである。身体を保護するウエアについては、肌に触れるものから順次上に重ねていくレイヤードシステム(重ね着方式)ということが考えられている。

●肌着(アンダーウエア)

米国ではベースレイヤーといわれている肌着の素材については、以前は汗を吸う綿がいいと考えられてきた。しかし現在では、むしろ速乾性を持つていて保水性のない合繊素材がいいとされている。ひところは綿の肌

着に代わって薄手ウールのセーターが使われたこともあったが、ウールといえども保水性を超える発汗によって冷たさを感じることもある。

水を吸わない軽い素材として、ポリプロピレンや塩ビ系繊維、アクリル繊維などがあるが、現在ではポリエステル繊維(ダクロンQDやサーマタットなど)が圧倒的に多く使われている。これらは繊維の断面に工夫が凝らされ、表面積を多くして水分の発散をよくし、すばやく乾燥させる機能をもつ。

速乾性があるために体温を奪わない(ヒートロスを防ぐ)ので、体力の消耗を少なくする。さらに抗菌性能なども付与されているので、長期間の連続着用による悪臭や汚れなどの問題も少ない。

●中間着(ミッドレイヤー)

肌着の上に重ねて着用されるものとしては、ウールのシャツやフリースジャケット、ニットで作られたラガーシャツなどがあり、最近では羽毛を入れたダウンインナーなどもある。いずれもかさばらず、重くなく、風を防ぐことが期待される。現在注目されているものに、ウインドストッパーといわれるゴアテックスを裏面に使用した、風を通さないフリースジャケットがある。風の強い冬季に着用するのに適している。

●外着(アウターウエア)

アウターレイヤーとして一番外側に着用されるもので、ジャケットや雨衣などのことである。透湿防水性能を持ったゴアテックスなどの生地を使用したジャケットや雨具で、細い繊維を材料にして作られたしなやかな生地を使用したのは、軽くてかさばらないから、余り高くない山では最適である。しかし風が強く、耐久性が要求される冬山などでは、ある程度厚手の生地を使用したもののほうがよいだろう。

きわめて気象条件の厳しい高山では、天然の羽毛を十分に使ったダウンジャケットを外着として着用するほうが体温の低下による消耗を防ぐ点で効果が大きいといわれている。

雨具の手入れについていえば、適度に洗濯をして表面の汚れと同時に内面の汗の付着による汚れを落とすことが、防水性の維持に大切である。表面に撥水スプレーをかけてアイロンを当てて撥水性を回復させておくことが、本来の透湿防水性を十分に発揮させるために肝要である。

組み合わせの優れたウエアを着用して冬季に登山をする際に、自分自身の発汗に関する意識が十分でなく、思っている以上に体内の水分が発散して消耗していることがある。これによる血液濃度の上昇、血糖値の上

昇による凍傷などがあるので、発汗を意識しなくても十分な水分の摂取を心がけなければならない。

また、からだのボディー部分よりも体温がずっと低下する末端の足指や手先、頭部などを保温するための靴下、手袋、目出帽などにも十分に気を配ることが必要である。

ウエアなどで表面や全体にせつかく優れた素材を使っている、裏地や付属部分に不適当な素材が使われていると、機能がフルに発揮できないので、素材全般について注意しなければならない。

二、登山靴の選択とメンテナンス

●靴の選び方

登山靴にもいろいろなタイプの靴があり、自分の山行目的に添った靴を選ぶべきである。ことに靴のメーカーについては、総合的に靴を品揃えているメーカーが作る登山靴よりも、登山靴を専門に作っているメーカーのものを選ぶほうがよい。

登山における登山靴は、快適で安全な山行に最も大切な道具なので、慎重に選択したい。登山用具専門店で自分の登りたい山、自分の登山経験などを率直に話して自分に適した靴を選ぶべきだろう。購入する際は、きちんと靴下を履いて、両足に靴を履き、靴紐を締めて、できれば傾斜したところに立ち、足の指先が動く

か、甲の部分、足の脇の部分、踵の部分がついたり靴にフィットしているかどうかをチェックしなければならない。よく自分の足は甲が高く、幅が広いと決めている人がいるが、計ってみるとそうでないことが多い。素直に足にあった靴を求めるべきだ。

●靴下

靴下は、裏がパイル地になったウールソックス一枚がよい。薄い靴下だと足が中で動く。速乾性の靴下は汗が充分に通らなくて中が蒸れるが、ウールだといったん水分を吸い、徐々に発散させるので、中が蒸れにくい。できれば靴下を一定のものに定めていつもびったりした状態で靴を履きたいものである。

●靴の手入れ

山行後、靴についた泥を水で洗ってきれいに落とし、陰干しをする。表面が皮と布地のコンビネーションの場合は、フッ素系のスプレーをかけ、表面が革の靴は皮革油を軽く塗る。次に靴の中に新聞紙を丸めて入れ、きちんと紐を締めて、直接光の当たらない湿気の少ないところに保管しておく。ビニール袋などに入れて保管するのはよくない。

三、ザックは体に合わせて

近頃市場に出ているザックは、同じ重さの荷物をより軽く背負えるよ

うに考えて作られていて、万人に合うように科学されている。トルソー・トラック・サスペンション・システムといわれる、身体全体(肩、腰、背中、腹)を使って力を分散させて楽に背負えるように工夫されている。いろんなベルトがザック本体についているが、それぞれに役割があるので、それらを十分理解して使ってほしい。

男性用、女性用などと分かれているし、容量も大から小までいろいろある。目指す山行の程度に合わせて実際に自分で背負ってみて、どれを購入するかを決めるべきである。

背負い方としては、まず背負って腰の部分のウエストベルトを締める。次にショルダーベルトを引いてザックの付け根が自分の肩甲骨のところにくるようにする。トップベルトを引いて背中に三角形の空間ができるように調節する。荷物の量によってコンプレッション・ベルトを締めてザック全体の厚みを薄くし、重さを分散させる。

ザックは十分汚れやほこりを落として保管すべきだが、むやみに洗うのは防水性が落ちるので避けたほうがよい。

●ストック

ストックを持つて歩くことによりバランスを保持してリズムを取るこ

とができ、膝にかかる負担を軽くする。ストックを持つ高さは腰の高さくらいで、余り長くして持つと肩に負担がかかり、筋肉がかえって疲れる。先端のゴムのキャップはアプローチではつけておいてもよいが、山道に入ったらはずすべきだろう。ストックの長さの調節は上下を一回転ぐらい回すだけでよく、むやみにまわすべきではない。

使わないときは上下をはずして十分汚れと水気を落とし、分離したまま保管するのがよい。

■登山用具の信頼性

アメリカでは国防省が中心になっ

南米アンデス花の山旅

アンデス・ブランカ山群ハイライトとグスコ・マチュピチュ9日間

ブランカ山群を望む街ウラスを基点に、車で周辺の峠や谷を訪れ、雪山や氷河の大パノラマを堪能。発着地：東京・大阪

旅行期間	旅行代金
5/29(月)～6/6(火)	¥480,000
6/12(月)～6/20(火)	¥480,000
6/26(月)～7/4(火)	¥480,000

運輸大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員

アンデス・ブランカ山群トレッキング11日間

ブランカ山群随一の美しさを誇る谷をめぐる、テント4泊のトレッキングコース。4,750mのウニオン峠を越えます。発着地：東京・大阪

旅行期間	旅行代金
5/25(木)～6/4(日)	¥430,000
6/8(木)～6/18(日)	¥430,000
6/22(月)～7/2(日)	¥430,000



アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪☎06(6444)3033 名古屋☎052(581)3211 福岡☎092(715)1557

て、いろいろな用具の使用テストを実施し、そのデータを広く一般に公開している。各種の優れた素材が広範囲に使われるようになる。一方日本では、公的機関のデータなどはなかなか公表されないし、生産者の団体も品質について保証や説明を積極的には行っていない。したがって登山用具の選択に当たっては、個別の生産者のデータを信用せざるを得ないし、あくまでも自分の目で確かめて、実績のある安心できるものを選ばなければならないようだ。

*

説明の区切りごとに会場から多くの質問が寄せられ、また休憩時間には、講師が持参した多くのサンプルを手にとって積極的にたずねる聴衆も多く、用具に対する関心の深さがうかがわれた。会場の聴衆からのアンケート結果はいずれも大好評で、これだけ具体的な話はなかなか聞けない、もっと大勢の人に聞かせるべきだ、などという声があった。

さまざまな登山用具が市販されており、登山者が選択に迷うほどだが、自分の登山に適合した自分の用具を選び、その機能を十分に理解してフルに活用するために、使い方に習熟することが必要であることを強く訴えた、意義深いフォーラムであった。

中国登山協会代表団の 歓迎会を開催

二〇〇〇年一月二十五日六時三十分、西珠朗杰中国登山協会副主席を団長とし、高謀興西藏自治区登山協会秘書長、趙江援中国登山協会副秘書長兼交流部部长、趙建軍同副部长を団員とする中国登山協会代表団歓迎会が水道橋グリーンホテルにおいて行われた。

大塚会長の歓迎の挨拶のあと、西珠朗杰副主席は長年にわたる日本山岳会との友誼を回顧するとともに、次の世紀に向けた両団体の新しい取り組みを強調するスピーチを行った。西珠朗杰副主席にとっては初めての訪日であり、全国の登山関係団体との連携を確認強化する旅であったようだ。

歓迎会に先立ち、日本山岳会ルームを訪れた西珠朗杰副主席は、一昨年から西藏自治区登山協会副主席でもある。その前はチベット自治区文化庁長官をお務めであったそうで、図書室でチベット関係の書籍や写真集を次々と手に取りながら語るチベット文物に関するさすがに詳しい解説に一同感心したものであった。

(海外連絡委員会・増山 茂)

若人のヒマラヤの夢 ネパールに記念事業

栃木県立佐野高校山岳部OB有志他が、ネパールのラトリプール(パタン市)に水洗トイレを建設、寄贈した。

同校山岳部は一九五〇年十二月三十日、谷川岳西黒沢で冬山合宿中に雪崩に遭遇、十一名中五名が死亡した。それから五十年の節目を迎えるにあたり、亡くなった仲間が目指していた、ヒマラヤの地で追悼行事をと、現地で不足しているトイレをラトリプール市内の外国人観光客用他バスターミナルに、土壌浄化法を用いた汚物を微生物などを利用して浄化する(ニイミ式)水洗トイレを寄贈、十一月贈呈式を行った。環境問題でもネパールの第一歩になれば幸いと考えています。

(眞田幸俊)



パタン市に建設された水洗トイレ

日本山岳会・カナダ山岳会合同 アルバータプロジェクト二〇〇〇 募金のお願

アルバータプロジェクト募金委員会
本年八月、カナディアンロッキー山脈のアルバータ峰(三六一九メートル)初登頂七十五周年を記念する事業「アルバータプロジェクト二〇〇〇」をカナダ山岳会と合同で実施します。当会の偉大な先人の業績をふりかえり、継承することによって、若いクライマーを育成し、将来にわたって交流を深めていきたいという、両国山岳会共通の意志に基づいたものです。

すでに両山岳会三名ずつからなる合同登山隊員も決定し、準備は進行しつつありますが、安全対策等を考慮すると相当の経費が必要です。そこで、登山隊経費の一部を募金によりまかない、成功に万全を期すこととなりました。諸事ご多端の折縮縮ですが、募金にご協力くださいますようお願い申し上げます。

募金要項

目標額 三百万円

期間 三月一日～七月三十一日

方法 一口一万円(何口でも可)

振込先

銀行 東京三菱銀行市谷支店 普通預金

口座 一〇五九九四九(社)日本山岳会

アルバータプロジェクト二〇〇〇

郵便振替 口座番号 〇〇二二〇一〇一

一八四七〇五(社)日本山岳会アルバータ

プロジェクト二〇〇〇実行委員会

募金委員会事務局 (社)日本山岳会内

海外の山

青年は荒野をめざす

江本嘉伸



若きAAJの編集者、クリスチャン・ベックウイズ (撮影/江本嘉伸)

「Pole to Pole 2000」という計画がある。十二月号で数行紹介したが、カナダの極地冒険家、マーチン・ウイリアムズが世界の若者を集めて北極点から南極点まで人力で到達しよう、という試みである。カナダ山岳会のモーティマー会長を通じて日本にも打診があり、本会会員の二十二歳の早大生石川直樹が選ばれ、二月末カナダに向かった。

ウイリアムズは南極のヴィンソンマシーフ登頂に活躍したアドベンチャー・ネットワークという、冒険旅行サポーター会社の創設者だ。五十二歳になる。二〇〇〇年を迎えて未来に向けて記念になることを、と考える計画を立ち上げた。資金集めなど困難はあったが、南米、米、カナダ、韓国、アルゼンチンなど各国の十八歳から二十六歳までの八人の男女が集結したのを見て「違った文化をもつ若者たちが、同じ目的に向かっている姿に感動し、責任を感じている」と、筆者に伝えてきた。

石川は、山登りのほかミクロネシ

アで星座航法を学ぶユニークな冒険家。一行は四月一日北極点をスタートし、徒歩、自転車、カヤックなどで南極点に二〇〇〇年大晦日まで到達する計画だ。

広い大陸は、若者を育てる。そのことは、二月半ば、日本山岳会のゲストとして来日したクリスチャン・ベックウイズと会った時にも感じた。ベックウイズの印象を一言で言えば、三十一歳というその年齢だろう。登山のような肉体的な行為を実践する者として三十代は際立った若さではないが、「アメリカン・アルパイン・ジャーナル(AAJ)」の編集者と聞けば、やはり格別な若さがまぶしく感じられるのである。

ベックウイズは、山岳会と日山協会で講演をし、山野井泰史ら日本のクライマーとも交流した。講演ではヨセミテでのクライミングが自然保護の名目で次第に規制の度合いが強まっている現状に興味深く語られた。ベックウイズが登山をはじめたのは、イギリスのカンタベリー大学に

留学していたときだった。ここでは、学生たちは自転車、カヌーなど何かひとつスポーツをやることになっていく。はじめダイビングをやったが、自分にはあわないと感じ、山登りに挑戦したら、これにはまった、という。

帰国してからジョシユア・ツリーに行き、同じ年代のクライマーたちとクライミングを楽しむようになる。金はないが、楽しかりし日々。もともとヒッチハイクの達人で、英国からトルコ、チェンマイからスマトラなどの長距離のほか、ジョシユア・ツリーからアラスカ、ワイオミングからジャクソンなどアメリカ各地でもヒッチでの旅を実践している。「こざっぱりとした服装と危険を感じさせない笑顔」がヒッチの極意だそう。

ジャクソン・ホールのテントに移り住んだのが九三年、ここでクライミングをしながら自前の山岳会「Wayward mountaineers」(わがままな登山家たち)を結成、山の雑誌「Mountain Journal」を発行した。同じジャクソンに住む著名なクライマー、イボン・シュイナードと知り合ったのも、この頃だ。

五号まで発行したところで、AAJの編集者アダムス・カーターの計報を知る。山岳会では、カーターの長い業績を改めて称え、とともに後継者探しに入った。その中でシュイナードが、若いクリスチャン・ベックウイズをどうか、と紹介したのである。

「自分としては喜んでオーケーした。当時定職はなかったしね。一週間か一カ月働いては山に行く、という暮らしだった。大工やウェイターなど三年間に二十五もの仕事をやったんだ」

はじめは、そんなに大それた仕事とは考えなかった。しかし、すぐにそうでない、と気づく。アメリカ山岳会は、二十六歳の青年にいきなり大役を負わせたのである。

失敗も多かったが、勉強もした。正確な情報をどう集めるかにも苦労する。とりわけヒマラヤに出かける人が多いのに日本からはほとんど情報が入ってこないことに。

ベックウイズによれば、九九年の偉大なクライミングのひとつは、コンラッド・アンカーがチョモランマの第二ステップを中国隊の梯子を使わずにフリーで登ったことではないか、という。あのジョージ・マロリー捜索隊のメンバーとしてマロリーを発見したアンカーの思い切った試みについてはこのコラムでも書いた。ベックウイズの情報と、その若さにあふれた視点については今後も紹介する場面が出てくるだろう。

最後に、もう一人の青年の話。米「Climbing」誌三月十五日号は「世界のベスト・クライマー」を特集しているが、そのトップに日本の平山ユージが「Best All-Around Rock Climber」として大きく紹介されている。少年時代から自分の力で今の地位を得た「ユージ」。静かに拍手を送りたい。

報告

REPORT
3月

集委員会

快晴に恵まれた
志賀高原のスキー懇親会

一月八日から十日までの三日間、志賀高原横手山の麓「山本荘」でスキー懇親会が開催された。地元長野をはじめ、東京、名古屋、金沢方面から三十八名が参加した。宿泊地の受付は午後四時のため、参加者は昼前後に着いて周辺を滑ってから宿に赴いた。

その夜は、勝山康雄理事から今後のスケジュールなどについて説明があり、最年長の斎藤邦夫さん（七十四歳）の音頭で乾杯、夕食会が始まった。平均年齢は六十歳、ほとんどの方が経験豊富でスキー談義に花が咲き、皆さん年齢に関係なく本当にスキーを楽しんでいる様子で、大変和やかな雰囲気であった。

二日目は、山スキー組、奥志賀方

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

面、熊の湯組など四グループに分かれ、快晴の一日を楽しんだ。

私はグレンデスキーのほか、この日に備えて山スキー一式をそろえてきたので、山スキー組に加わった。一行八名、半日コースの予定で横手山から渋峠、草津方面へ下り、登りでは初めてシール歩行も体験した。初めての山スキーは多少グレンデスキーの経験があっても勝手が違い何回も転倒したが、グレンデにはない樹林帯、起伏と雄大さは格別であった。雪は少なく、雪質はいまひとつだったが、青空の下三六〇度の大パノラマ、富士山まで見渡せる天候は何よりであった。午後からは横手山周辺のグレンデをリフトが終了するまで山スキーを楽しんだ。

二日目の夕食会・懇談会は和やかに始まり、三十八名の自己紹介、そして当日誕生日の岡野修さんを、女性スタッフ手作りのケーキでお祝い

をするなど、昨夜に増して盛り上がった。

三日目の朝、雪崩で遭難したときのビーコンの取り扱い訓練を受けて解散した。今回のスキー懇親会は三日間とも天候に恵まれた。

また、七十四歳の斎藤さんを筆頭に年齢を感じさせないかくしゃくとした滑りは、その気になればできるという勇気を与えてくれた。私も今後は、真冬はグレンデ、雪が安定する五月頃から白馬、立山方面で山スキーに参加し、大自然にふれたいと思っている。

本会に九八年入会し、会報などからできる限り研修会・ツアーに参加するようにしているが、見聞することが新鮮で大変参考になる。入会できて本当によかった。（前田健進）

三水会

新春山行

秩父観音山と西上州二子山

三水会とエーデルワイスクラブ恒例の合同新春山行が、一月八日、九日にかけて秩父で行われた。参加者は十八名。

西武池袋より快速急行にて一路西武秩父駅へ。まずは栗尾行きバスに乗り終点で下車。約三十分歩いて秩父札所三十一番目の観音山観音に参

詣。観音茶屋で昼食後、タクシーに分乗して坂本の奥にある民宿「登人」に宿泊する。

翌日は、朝食後二子山へ向かう。東と西にそびえる岩峰はドーンと構えて見える。二子へと林道を登ると、西と東の二つの峰の間に股峠がある。沢沿いに歩くと民宿より股峠までは一時間ほどである。

途中で後ろを振り向くと、両神山が迫ってくるように見える。そこで一行は西岳組と東岳組に分かれて頂上まで登り、坂本発十二時四十分のバスに間に合うよう急いで下山。民宿でうどんをいただき、バス停へと向かう。

峠では下からロッククライミングをする仲間をかなり見かけたが、ここはロックグレンデとしても面白そうだ。車を使えば日帰りも可能であるが、タクシーでは値がかさみ、バス利用ともなれば本数が少なく、奥秩父方面の山行は頭が痛いようである。（樋口公臣）

医療委員会

講演会

医療協力の現場から

二〇〇〇年一月二十一日（金）、ルームにて医療委員会の講演会が開催された。

一、「ムスタン・ローマンタンにおける新しい診療所の立ち上げ」
講師・原田てる子氏

ムスタン地域開発協力会（近藤享理事長）が進めているムスタンのローマンタン地区ガミ村での医療協力プログラムに従事されている原田さんからは、昨年ようやく立ち上げるに至った診療所開設の苦労話をうかがった。ネパールでもさらに奥深い地域アツバームスタンの美しいスライドを交えた興味深い話に聴衆は魅了された。

二、「レラミッドの麓の二年間」

講師・荻原理江氏

豊富な国際経験をお持ちの荻原さんからは、世界各地の文化的、宗教的多様性と、旅行や登山と医学をかけた面白い話をうかがった。二年間にわたるエジプトJICA勤務から昨年秋戻ったばかりで、イスラム圏の文化を理解することがこれからいろいろな局面でさらに必要になると強調された。

これらの話題は医療関係以外の方の興味も引いたようで委員以外の多くの参加者を得た。大森副会長と黒石委員など一部の方を除くと、出席者の平均年齢は現日本山岳会会員のそれを二十歳ほど下回る勘定であり、和気あいあい、かつ活発な質疑も楽しめた会であった。

(増山 茂)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

秋田支部

設立四十周年記念祝賀会

秋田支部設立四十周年記念祝賀会が平成十一年十一月二十日、男鹿市の旅館で開催され、本部からの来賓二名に加え、支部会員二十八名が出席した。

定刻午後五時三十分に関会し、佐藤兼治支部長が式辞を述べ、ついで荒巻初代支部長からついで過日の今野実会員まで、十八名の物故会員の冥福を祈り、黙祷をささげた。その後、本会会長代理として大森薫雄副会長から祝辞をちょうだいした。引き続き「百周年を迎える日本山岳会」と題して松田雄一百年史委員会委員、「中高年登山者の医学的諸問題」と題して大森副会長の記念講話をいた

だいた。

全員で記念撮影の後、岡田顧問の乾杯の発声で祝宴に入り、遠来の坂顧問を皮切りに、進藤、長岩、安藤各顧問が四十年の思い出をユーモアを交えて語った。また、佐藤(税)会員が四十周年を記念してのタイムカプセル埋設計画(十年後に開封)の披露と、太平山前岳中岳への埋設作業の協力を要請した。

祝宴の開始時刻が少しずれたため杯をあげるピッチは早かったが、参加者全員が心底から酒肴を味わい、酔い、和やかに四十周年を祝った。

午後九時頃には、北林副支部長の発声で中締め乾杯。以後は深夜・夜明けまでがんばった御仁もいたそうだが、真相は定かではない。

支部設立四十周年は一千年代最後の年にあたり、新しい節目に向かう初年度は二千年という新千年紀の始まりでもある。まことに縁起がいいこの機会に、日本山岳会の趣旨と秋田支部の存在を再確認し、磐石の組織を継続させたいものである。

(鈴木要三)

吹越烏帽子(青森県)山行

平成十一年十月二十三、二十四の二日間にわたって開催の、青森支部が主管する東北地区支部集会(下北

半島「釜臥山」に参加した。その往路、秋田支部の一行八名は、二十三日、吹越烏帽子(五〇八メートル)に立ち寄った。

吹越烏帽子の名前は、陸奥湾から吹き上げる強風が下北一ということからついたといわれる。

その名のとおり頂上への稜線に取ついたらとたん、立つていられないほどの強風の洗礼を受けた。この日の強風は、青森県下に強風警報が発令されていて、青函フェリーが欠航し、JR大湊線は一部でバスによる代行運転をするなど、交通機関にまで影響を及ぼしていた。

幸い視界は良好で、頂上直下の道にはロープが張ってあり、どうにかこれにすがって登ることができた。頂上の大山祇神社の拝殿はかなり前に倒壊したようで、残材がロープで一まとめに固定されていた。鳥居と小さな祠がころうじて強風に耐えている。記念撮影もそこそこ下山。

しかし山頂からの眺望は素晴らしいものがある。太平洋と陸奥湾や六ヶ所村の原子力施設も遠望できた。登山道は明瞭で、管理も行き届いていて清潔に保たれていた。ただ、国道から登山口に至る道筋の案内が目立たないので注意を要する。(登山口出発十一時三十五分、山頂到着十二時四十分)

(鈴木要三)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度をお願いします)



イラスト・宇都木慎一

古い写真について

川崎精雄

『山』六五六号の資料委員会「資料受入」報告に関して、一言申し添えさせていただきます。



越後駒山開きに(大湯温泉にて)昭和29年5月1日撮影

の越後駒山開き、場所は大湯温泉、背景は残雪豊かな越後駒、撮影は同会会員のI君です。写真の人物は前列中央に高頭仁兵衛氏ご夫妻と令孫(お嬢さん)、左右が横有恒氏と武田久吉氏。後列左より牧野衛、成瀬岩雄、村井米子(ふたりおいて)笠原藤七の諸氏と小生(川崎)。現存者は笠原、牧野両名誉会員と川崎の三名。

大変貴重な写真ですが、私自身も中の一人

なので処遇に困り、迷った末に小倉副会長にお任せしたところ、このような扱いをしていただき、ありがたい次第です。

なお、この写真の前身はもっと小さいのですが、会員で優秀なカメラマンの羽田栄治君にお願いしたところ快諾、拡大していただいたもので、同君によればもっと拡大できる由です。改めて小倉、羽田両氏に感謝いたします。

田口二郎氏の『山の生涯』とアイガーヴァントをめぐる・I

近藤 等

アルプス関係で私が最も尊敬し、また私のアルプスでの山行を最もよく理解してくださっていた田口二郎氏の『山の生涯』(上下二巻)は真に充実した内容で、熟読した山岳書だ。

すでに会報六五四号で渡辺兵力氏が書評を執筆しておられるが、その文中「アイガーに関する文(アイガー北壁五十年)はスイス・アルプス地域の文化的交流や軋轢が語られていて勉強になった」と書いておられる。

このアイガー北壁初登攀五十年祭に関する資料は確かに私が田口さん

に差し上げたもので、これを読んだ田口さんがご自身の感興についてお書きになったのだ。

私は田口さんのように初登攀された一九三八年のグリンデルワルトは知らないし、五十年祭のときはシャモニに滞在していたが、グリンデルワルトには出かけていない(五十年祭の資料は観光局長のヨゼフ・ルツケンさんからいただいた)。したがって、初登攀の一九三八年と五十年後の一九八八年の祭典のときの雰囲気にはじかに接していないが、アルプスに関心のある会員のために、田口さんの文章を少々補足するのを許していただきたい。

まず「ヘックマイヤーの相棒フェルクがどうなったのか、私は知らない」と田口さんは書いておられるが、フェルクは第二次世界大戦のはじめ、東部戦線で戦死している。

田口さんは五十年祭の式典でのハラーのスピーチはすばらしかったと賛辞を呈しておられるが、ヘックマイヤーのスピーチの内容とヘックマイヤーの人間性そのものがあまり気に入らなかつたようなので、私としては二十世紀ドイツを代表するクライマーであるヘックマイヤーをいくらかでも擁護する意味で、彼のライバルではあったが、壁の中で一緒にザイルを組んで成功したH・ハラー

の名著『白いくも』に書かれている一説を引用させていただく。

「われわれ四人のうちで、アンデルとわたしだけがまだ生きている。……彼の謙虚な性格は本物で、いかなる榮譽も得ようとは思っていない。ユリウス・クギーはあるとき、登山家としての資格について聞かれたとき、それは『誠実で、気品があり、そして謙虚であること』だと言っている。アンデルはちょうどそのような男だった。だが、わたしはクギーによる資格に、アンデルがとくに豊かにそなえていた性質を二つつけ加えたい。すなわち『勇敢で忠実であること』と」

■グリンデルワルトのガイドとアイガーヴァント

初登攀が成功した一九三八年夏、グリンデルワルトに滞在していた田口さんは「村の人々と山案内人たちは、この登攀と成果にたいして喝采もあげず拍手もせず、そのかわり暗い怒りをもって黙殺したことを昨日のように覚えていいる」とお書きになり、村民がアイガー北壁の登攀者に対して抱いていた悪感情を具体的に述べられている。

田口さんがお書きになっている感想は、現場におられたのだから正しいに違いないが、グリンデルワルトのガイドたちが自分たちでアイガー

ヴァントを登ろうとしなかった事実に対する私の意見を少し述べてみる。

今世紀前半のアルプスのガイドたちが実行していた登山の定型は、登山者が登りたいと思う山を、主としてその一番やさしいルート（一般ルート）から案内して登ることであり、こうして得た収入で家族を養っていたのだから、安全第一が鉄則であった。案内する客の体力と技術で可能な範囲の山登り（グレードで二級から四級まで）が主流だった。

今世紀後半に一般化したトップ・クラスのガイドが仲間同士で実行する困難なクライム（こうしたクライムはフランスでは *en amateur* という。ガイド料をもらうプロとしてではなく、仲間とアマチュアとして登る山行で、トレイとラシユナルのアイガーヴァント第二登がこれに相当する）つまりエクストレム・アルピニズムは実行されていなかった。

したがって、当時の登攀用具と装備では危険な要素が多い高さ一八〇〇メートルのビッグ・クライムを客をリードして登ることなどはまったく考えられなかったのだ。六級のルートを登りたいと思う客、登れる客はいなかったし、客をリードして登る自信のあるガイドもいなかった。ではなぜお互いに実力がわかっていないガイド仲間登ってみようとしたのか。彼らの実力では北壁に登攀ルートを見出せなかったのだ、というよりもアイガーヴァントの暗い壁にルートを考えようとすれば異端視されたのだ。当時のグリンデルワルトにはアイガーヴァントを登ってみようというフアイトと実力があ

るガイドはいなかったのだといつては過言だろうか？ いや、一人はいたはずだ……。

アイガーヴァントの左（東）に氷雪と岩のすばらしいミックス・ルートがある。北東壁だ。高さ一八〇〇メートル、コンディションが悪いことが多く、現在でもグレード六級とされている、日本人で登った者はまだいない。初登攀されたのはアイガーヴァントの六年前の一九三二年。当時のアマチュアとしてはトップ・レベルのH・ラウバーとA・ツエーリヒャーをリードした当時の名ガイド、J・クヌーベルとA・グララウエンによつてだった。この両ガイドもグリンデルワルトの出身ではなく、よそ者のヴァリスの出身だった。

当時のグリンデルワルトで北東壁やアイガーヴァントを登れる実力があり、登りたい意志があったのは、横さんを東山稜でリードしたフイリ

ツ・シュトリイの次男、ヘルマンただ一人であつたかもしれない。

このヘルマンがマッターホルンの北壁の第二登を果たしたと田口さんは書いておられるが、正確には第三登だ。一九三五年七月二十四日のことで、A・パウアーをリードして完登した。ヘルマンは二十六歳、客をリードして北壁を登った最初のガイドになった。なお、客をリードしてアイガーヴァントとグラランド・ジョラスの北壁を最初に登ったガイドはガストン・レビュファで一九五二年の夏だ。話を戻してヘルマンのマッターホルン北壁のタイムがすばらしい。ヘルンリ・ヒュッテ発午前〇時四十五分、頂上到達午後一時四十五分、正味十三時間のクライムで一日で頂上に抜けたのだ。

このペアなら北東壁やアイガーヴァントの登攀は敢行できたはずだが、グリンデルワルトにはヘルマンのパートナーになる仲間のガイドはいなかった。それに「北壁を登つたら殺すぞ」とヘルマンがすこまればという話を私は実際に耳にしたことがある」と田口さんは書いている。なお話をまたマッターホルンに戻すと、北壁の冬期女性初登に成功し

今年もマッターホルンで会いましょう

たのは鳴秋子さん。一九七八年三月七日から九日にかけてのクライムで、パートナーは夫の満則君だった。『山の生涯』の下巻、各務良幸氏のことを語っている章で田口さんが「夫婦で冬のグラント・ジョラスに登った後に夫を亡くした鳴秋子さん」と書いているのは思い違いで、二人は冬のグラント・ジョラスは登っていない。女性としてジョラスの北壁、ウォーカー・バットレスの冬期初登に成功したのは長尾妙子さん。一九八二年一月十九日から二十五日にかけてのクライムで、パートナーは鈴木恵磁君だった。(次号に続く)

「ミレニアム」の白い山々

新妻 徹

ミレニアム(千年紀)という表現に合わせて、コンピュータ誤作動が起こるかもしれないという「Y2K問題」に振り回された岳友も多かった年末年始であったが、穏やかな元旦であった。私は例年のように札幌の三一メートルの三角山のピークでJACC会員・三戸部清文氏と乾杯したが、七時六分の御来光は雲にさえぎられていた。

しかし、やはり白い山頂はいい。山頂から携帯電話でおしゃべりして

いる若者を除けば、昔のままである。私は札幌の丸山小学校や第二中学校の頃に三角山で遊んでいたの、古希を迎える年齢になっても昔のままのピークに立つと心が安らぐ。

北海道神宮に参拝し、山鼻の自宅で孫たちと朝食をとってから、新年茶会の「お水汲み」に羊蹄山麓の京極に向かう。マイカーに高橋桓志、赤石喜恵子さん、そして京極登山口の畠山勝・廬子さんの山荘に泊めていただくので、中山峠はノン・ストップで通過。同乗のJACC会員も、山荘のJACC会員も、さすがに格調高く「ミレニアム」をめぐる元旦の夜は遅くまで杯を重ねた。

人類の歴史は数百万年も昔にはじまったが、数字の〇に気づいたのは約千五百年前なので、長い人類の歴史上では、ごく最近のことになる。「何もない」という最小の数字〇の存在は、インドからアラビアを経てヨーロッパに伝わったといわれるが、〇の存在を知らなかったローマの修道士ディオニシウス・エクシグウスは、約一四七〇年前に、キリストの生誕年を逆算して西暦紀元一年と定めた。もし、エクシグウスが西暦を紀元〇年からはじめていたら、二十一世紀は今年からはじまることになるのではないか……。

しかし、〇の存在は「無の世界」

であり、加工の方法によつては、どんな色にも染まる可能性があるという人生の哲学を示唆する。三十八年間も高校生に生物や地学を教えてきたが、定年退職した今ごろになってから、〇の存在を意識するとは情けない。私の授業は受験対策に追われ、真理を探究する虚心坦懐な姿勢であつたらうかと深く反省した。

一月二日の羊蹄山は白く輝いていた。緑の山は落ち着いて見え、紅葉の山は美しい。しかし白い山からは「無の境地」を強く受ける。また今年も白い山々に行こうと心で叫び、羊蹄山に何回もカメラを向ける。カメラの日付は「00・1・2」とゼロから数字が美しく整列していた。

ローゼンラウイの宿帳

三井嘉雄

松方三郎による『ウェストン翁について』の文章の中に、フランセス夫人との出会いについて「交際のはじまりがローゼンラウイだというのだから、」という記述がある。

グリンデルワルトの北東一〇キロにあるローゼンラウイの一軒宿、ローゼンラウイ・ホテルの宿帳に、ウェストンと後の夫人の記帳が見つかった。発端は元信濃支部長の奥原教

永氏から。いきさつは後述する。

日付は一九〇一年八月一日で、夫人のほうは家族四人で泊まっている。記入された順に記すとフランセス・E・フォックス、アグネス・ホーン、フランシス・フォックス、チャールズ・ベリスフォード・フォックスで住所はウインブルドンとある。四人の名前の上の行間にウェストンの名があり、奥原氏はウェストンが後から到着したためではないかと推定している。

アグネスはフランセスの父フランシスの後添えで、この年結婚するが、旧姓のホーンであるので挙式はこれより後であろう。その父ヘンリー・キング・ホーンは、ノーマンディの出身である。フランセスの母シリナは、一年前に亡くなっていた。最後に出るチャールズはフランシスの二人の息子の一人である。

一方のウェストンは、七月十二、十三日にはベルグリのクラブ・ヒュッテに泊まっているから、グリンデルワルト周辺の山を楽しんでいたのであろう。ヒュッテはアイガーの東南一・五キロの高所にある。松方のいう「ウェッターホルンからヴェッタークェッセルの水河をわたって下りて来たウェストンさんを見たのが最初の会見た」にも地理的に合致する。ただ私には、ウインブルドン

の教会で牧師と信徒という関係が発展したものと思える。ふたりの結婚は翌年の四月で、式から二十日後に日本に向けて出帆する。

この発見には偶然が重なった。奥原氏は会員の早乙女緩次氏から、松方の文章を教えられた。奥原氏の息子・達氏は、スイスのマイリンゲンに住んだことがあり、そこから程近いローゼンラウイのホテルの主人で、冬はスキー教師をするアンドレヤス氏とじつ懇で、愛称ドレースで語り合う仲だという。

おまけにアンドレヤス氏はちょうど日本にきていて、達氏が経営する乗鞍高原のローリー・ホフにいるというではないか。奥原氏からお願いしていただき、帰国後すぐにファックスで宿帳が届くという幸運だった。ドレースに感謝する。

西部コンロンの秘境に行く

児玉 茂

昨年の九月一日に、二〇〇〇年夏の西部コンロン登山のための偵察に私は単身で現地に向かった。一九八一年のJAC学生部登山隊に加えていただき、開放されて間のないボゴタ峰を訪れて以来の中国で、「改革開放後」の大きな変化を聞くにつけ、



ABC予定地が見えるあたり (5400m)

久しぶりに訪れる北京やウルムチがどう変わっているのかを眺めるのも楽しみだった。

登山開放直後の当時は万事に制限があり、双方の合意に基づく「議定書」は絶対的で、団体行動でない個人の行動は不可能とされていた。この中国式のやり方は、ネパールやカラコラムを歩き回った経験のある者にとつてはこの上ない不自由さに映った。そこでどこまでの融通性があるのかを探ってみた。それが将来の中国登山や旅行の面白さを広げることになるのではないかと信じたからである。「議定書」に書いてない活動を行うために、現地で直接交渉して許可を取ったり、三人がウルムチから路線バスと二等列車を何度も乗り継いで北京まで帰るなどの試みをした。

活動範囲の拡張が認められた後、相棒と喜び勇んでボゴタ山群の南面へ下って行くと、カザフ人の放牧地があり、ウルトの周りには子供たちと犂猛な犬がいた。私たちはウルトに招じ入れられ、思いがけずお茶とチーズをご馳走になった。中を見回しながら私は、連絡官を通してではなく、直接地元の山人たちの協力が得られるならば山登りがどれだけ豊かなものになるだろうと思った。

十八年後のウルムチは高層ビルの林立する大都会に変わっており、私は空港からの道すがら、新疆登山協会の若い連絡官にウルムチの昔のことを話して聞かせた。十八階建てのホテルの部屋からは、延び広がった市街地と懐かしいボゴタ峰がよく見えた。

今回の目標の山チヨンムスターグは西部コンロンの東端にある第二の高峰（六九六二メートル）で、周囲に道路が一本もなく、東西方向に連なる五〇〇〇メートルの稜線のどこかを越えねば麓に達することもできない。開放されているチベットと新疆の山のどれもが内奥の山に違いがないが、軍用の道路が縦横に通じているがために、道路わきのベースキャンプから登山ができるという便利な山も多い。この山の場合は十九世紀の探検時代と変わらない長いキャラ

バンが必要なのである。

不便なこの山を対象に選び、ベースキャンプ予定地までのアプローチ（接近路）を確定し、登山ルートを偵察しようという試みは、昨年五月に私の仲間によって行われた。ケリヤの町からブルー村を経てケリヤ川源流域までは達したものの、悪天候とキャラバン運営の難しさのために、ベースキャンプ予定地のはるか手前で引き返さざるを得なかった。そこで今度はアプローチを全く変え、再度の接近を試みることにした。

カラサイはニヤの東南東一二〇キロにある小さな集落で、名前が載っていない地図が多い。ホータンや二

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目標が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。

重量78g.
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600
黄橙色メタリック ￥18,000 消費税別
カタログ代無料、電話、FAX、葉書でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3926-5411 FAX 03-3926-5411

株式会社 石神井計器製作所

ヤの人も存在を知らないという。私がカラサイ・ルートに注目したのは、ちょうど百年前、この村からチョンムスターグの麓を通ってケリヤ川源流部に達した記録があるからである。ホータンで、私にとって理想的な通訳ドリクンさんと出会うことができた。ホータン出身で専門学校の先生をしており、専攻も私と同じ、未知の土地を訪ねることに興味も関心も持っていた。

新疆登山協会はホータンから先の担当を地元旅行社に委託したが、その旅行社も前述のようにカラサイがどこにあるかを知らなかった。シルクロード観光は年々盛んになるが、辺鄙な村に用事のある者など絶えずなく、私たちはホータンを出発した時点から自分の判断で行動できる自由を得た。

カラサイは山地と平地の境にある村で、私たちが到着すると、早速人々が集まってきた。現在の人口は五十人ほどで、村人の大半が下の村に下りてしまい、牧畜を生業とする者だけが残っているという。ドリクンさんによれば、この人たちは二ヤ地方の方言で話している。

百年前の記録に出てくる地名を頼りに、チョンムスターグに至る行程を聞いてみると、聞き違いによる表記の差はあるが、それらの地名の多

くは今も生きていた。そればかりか彼ら自身がチョンムスターグの麓まで行っているらしい。放牧地がそこにあるからだ、一九七〇年代を境に今は誰も奥に入る者はいないそうだ。人口の減少もこのことに関係があり、下の村に定住して農業を生業にするように変わったという。

ガイドのできる人をロバ方として雇い、六人と十二頭によるキャラバンが始まった。ロバに乗るのは今回が初めてだが、往復十九日間の騎乗のおかげで自由に操れるようになった。家畜を運搬や騎乗に利用する文化のあることをすっかり忘れていた。

カラサイから平均標高四五〇〇メートルの荒漠地帯を一日二〇数キロのペースで進み、九日目に目標の山チョンムスターグの白く輝く巨大な山群を目にすることができた。チョンムスターグもトルコ・ウイグル語の一般名詞であり、特定の山の名だと思い込んでいるのは外の者たちだけである。そんな名の山が奥にあるなどとは村人の誰も知らなかった。

横有恒の呼び名で悩む元「山」編集長―他山の石

松田雄一

一九九三年の年末のある日、元

「山」編集担当理事の岡澤祐吉会員から、一通のしがきをいただいた。

文面には、明治天皇の初代侍従武官長であった岡澤精（くわし）は長州・萩の松本村の出身とのことであるが、信州の松本で育った自分としては、同姓でもあり、そのことが気になって岡澤精のことを調べている。最近目にした日本大学七十年記念で編集された「山田顕義伝」には、萩の松本村出身の人材として山田顕義とともに岡澤精の名が見られる。日本大学の図書館には、引用された文献があるのではないかと思われるので助力願えないか、とのことであった。

そこで、取りあえず大学史編纂室の柏村先生を紹介申し上げたことがあった。その後、この話は、私の記憶からすっかり忘れ去っていたところ、昨年の夏になって近刊の予告があり、十年の歳月をかけて漸く出版の運びになったことを知った。

『明治天皇の初代侍従武官長―事君十余年、頸骨為に曲がる―』（新人物往来社、平成十一年十月刊）の「はじめに」には、何故自分が岡澤精について調べているかという、その動機について触れられている。それによると、『山』四九一号に掲載した「秩父宮殿下のご手記」の記事が、当時まだお元気であられた昭和

天皇陛下のお目にとまられたことを耳にしたことも、調査欲をかきたてた一因であったとのことであった。

岡澤精（一八四四―一九〇八）は、長州・萩で生まれ、明治維新には、振武隊の小隊司令として幕府軍と戦いながら会津をめざし、途中長岡藩の隊と岡澤精率いる振武隊の小隊とが、阿賀野川べりで激しい戦闘を行っている。

岡澤精は、その後、陸軍次官まで昇進したのち、一八九四年から十四年間、侍従武官長として明治天皇にお仕えすることになった。この間、日清、日露の両大戦を明治天皇のお側でささえられた。本書は、明治天皇の初代侍従武官長として、「事君十余年、頸骨為に曲がる」と言われる程の信頼を得て明治四十一年十二月、その生涯を終えるまでの岡澤精の伝記である。

著者の岡澤氏は、会報「山」を四〇八号（一九七六・六月）から五二八号（一九八九・六月）まで、十年間もの間編集担当理事として活躍された編集のベテラン。しかも一九八七年には「スイス山案内人の手帳より」を発行した経緯もあり、当然のことながらYuko Matsuの呼び名は知りすぎるくらいよく知っているはずで、それにもかかわらず、本書の

「はじめに」の中で、榎有恒（ありつね）と誤ったルビが付されていたのを、見落としてしまった。

本人もこの点については、私への私信の中にも「山と関係のない歴史物の出版社だったこともあり、私自身も歴史上の人物のほうに気を取られて、事もあるうに榎氏に対し、大変失礼をしてしまった」と大いに反省しており、増刷の機会があれば直すように手配したといつて、大いに恐縮しておられた。

今回のような校正上のミス（見落とし）は、たまにはあり得ること。しかも本書は山登りとは、直接関係のない本なので、気づかれる方は少ないかも知れない。しかし、日頃榎有恒氏を尊敬している著者にとつて、榎有恒は特別の人なのである。

本書の「あとがき」に、「榎さんが山登りを通して得られた『自然の奥底に秘められた無辺際精神』といった心の境地は、本書を書いている過程でも、いつも心の片すみにあったように思う」とも書いている著者にとつては、どうしても自分を許せないものである。

誤植をなくすことは、編集者にとつての永遠のテーマといわれながら、なかなかできないことを、私自身も何時も感じていることである。今回の「東西南北」への投稿も、編集の

難しさと恐ろしさを、あらためて思い知らされたような気がしたからでもって他山の石としたいものである。

ウェストンと二冊の本

田畑真一

ボストンにあるアパラチア山岳会図書室について次の記事がある。「米国に渡ってからヨセミテ以外に山らしいものをみなかった故もある米国は余り僕の趣味に合わぬ。（田畑注、中略）ボストンでは Appalachian Mountain Club 図書室を訪問した。目星しい本は全部揃っている。仏語も著名な本は可成持っている。ウェストンさんの本も二冊ともあった（同、以下略）」（日本山岳会会報『山』第四十八号、昭和十年七月）

なお、発信人は「藤島」、宛先は「黒田宛」とある。日付は「六月十日」だ。それで「藤島」とは藤島敏男、「黒田」とは黒田孝雄だったと断定できる。当時、当人は役員として活躍していたからだ。

そして数カ月前の記事には「本会評議員藤島敏男氏は、日本銀行パリ出張員を命ぜられ四月二十五日竜田丸で横浜を出帆された。又彼の地より度々面白い山の便りを送られ会報

誌上を賑わすことであらう」（会報『山』第四十五号、昭和十年四月）とある。

だから、これを受けての報告だったことがわかる。

次に初めにあげた「ウェストンさんの本も二冊ともあった」についてだが、これらは何だったのか。私は一八九六年（明治二十九）発行の『日本アルプス―登山と探検』、一九一八年（大正七）発行の『極東の遊歩場』（日本アルプス再訪）だったと断定したい。昭和十年の時点では、一九二五年（大正十四）発行の『知られざる日本を旅して』、一九二六年（大正十五）発行の『日本』も

発行されていたものの、これらは山岳書とはいえない内容だ。だからこそ、山岳会図書室が所蔵する山岳書といえは、前者の二冊だったと考えられる。

ところで同クラブは現代に引き続き健在だ。ちなみにアドレスをあげておく。ボストンへ行かれる方には、今もこの二冊が所蔵されているのかどうか、ご関心がいただけないだろうか。

Appalachian Mountain Club 5 Joy Street, Boston Massachusetts 02108 U.S.A.

《別記》先人のお名前を敬称略とさせていただきます。

●新ハイキング選書●

藤井寿夫著

中央線の山を歩く

A5判・286頁・定価1680円（税込）

中央線の山を歩いて50年、中央線の山107座の紀行と案内。朝立ち、日帰りの範囲内、あまり登山者の歩かれていない山に重点を置いている。読物としても楽しい。最新刊 増刊出来

●深田クラブ編●

深田久弥の研究

読み、歩き、書いた

飯島斉 高澤光雄 高辻謙輔 深田クラブ編集部 共著

A5判・387頁・定価1680円（税込）

深田久弥の研究に造詣の深い三氏が、深田クラブ会報に、永年にわたり発表された成果をまとめたもの。深田久弥はこの一冊で全貌を顕す。

新ハイキング社 東京都北区滝野川 7-6-13
電話・FAX 03(3915)8110

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

岡村治信・著

『自然にあそぶ心』

— 山歩きと豊かな人生 —

著者は高等学校時代に哲学に進むことを考えたが、大学では法文学部を卒業し、ついで時代の要請に応じて海軍の主計科士官となり、素人軍人として慣れない軍務に身を投じた。太平洋戦争の開戦を迎えて満二年間の海上勤務中、夜を日について重要作戦に従事して幾度かきわどい場面に立たされ、若くして得た死生観は並大抵ではなかった。

終戦後は本業に戻り、裁判官として東京高裁の要職を経て、退官するまでに多くの事件を手がけ、その間に尊厳でありながらも不可解な「人

間存在」を強く感得する。一方、中学時代に常念岳に登って山岳美に感動し、以来、登山と自然に深く親しみ、平成二年に満七十二歳で日本百名山の全山登頂を果たした。

以上の経歴に基づく著者はすでに数冊上梓されているが、山の本としては本書が二冊目である。山と自然と人間に関する随想がしみじみとして、しかも「けれどものらない確な文体」(産経新聞評)で綴られている。

甲府地裁在勤中に始まった深田久弥との交友、山の動植物や物理現象、ピッケルや登山用具の話、ピンチからの脱出など、われわれの興味を引く話が次々と展開する。ユーモア、リリズム、雨月物語調まで程よく按配され、自然との対話の章では交響曲を聴く思いがする。この一冊を携えて山深い宿に憩うなども、どんなにか楽しいことだろう。

(阿部一孝)

一九九九年四月 原書房発行 二

一九ページ 千五百円

小西郁子・著

『小西さんちの家族登山』

尖鋭的登山を実践していた登山家の、家庭での素顔は？ 家族との時間とはどのように過ごしていたのだろう、またそんな時間があつたらう

か？

小西政継氏の妻、郁子さんが二人の出会いから結婚に至るまで、そして二人の山行のこと、子供が生まれてからの育児や、家族登山の様子を綴る。そして筆まめな小西氏の、遠征先から送られてきた手紙の数々は時々の登山の進行状況を家族に伝えるとともに、家族への温かい思いが込められていて、人柄を偲ばせる。

自信をもって育児に専念し、家庭を守ってきた妻は、小西氏の最大のパートナーである。尖鋭的登山から楽しむ登山に切り替えて、三回目のヒマラヤ、マナスルから夫は帰らなかったけれど、妻にも子供たちにも家族の中にはいつも小西氏がいる。清々しい家族の姿が語られている。

(渡辺玉枝)

一九九九年九月 山と溪谷社発行 三四九ページ 千六百元

松本健夫・編著

『遥かなり秘境』

ココシリ

可西里とはどこか。サブタイトルにあるように、それは「崑崙を越えて」青蔵高原に入ったところ。正確にいうと、崑崙山脈から南東に出る支脈である可西里山脈(東西およそ一二〇キロ)をめぐる山と高原と塩湖の地帯である。

可西里とはココシリと読む。地図によつてはホホシル、ホフシリとも振り仮名がつく。モンゴル語で「青い高原」の意味だそうだが、言葉とは裏腹に氷雪の山と褐色の砂漠と凍土の世界。山は六〇〇〇メートルを超え、散在する湖の水面標高も五〇〇〇メートル近い。

遊牧民の姿もめつたにみられないほどの苛酷な環境。前世紀末から今世紀初めにかけて、S・ヘインらいくつかの探検隊が入って以来、百年近くは訪れる外国隊がなかった。

本書は九四年夏、同地を調査した日中学術探検隊の記録。九州大学探検部の創立三十周年を記念、中国科学院との合同で実施された。編著者は日本側隊長。同大学理学部の出身で、現在は山口大学名誉教授。地質・岩石・火山学者で、南極はじめチベットやカラコルム、ヒンドウクシュでも活躍する行動派の学究にして登山家。当会の福岡支部長である。同氏は「理科学的内容が多いため一般の読者には理解されにくい点が多々あるだろう」と心配するが、永久凍土という極限の環境に暮らす人や、陸や水のもろもろの動植物、さらに気象や地理、火山やシルクロードの水利に関する考察は注目され、砂金採りグループとの接触も面白い。西域マニア、とりわけチベットや青

海に興味を持つ人には格好の本であろう。
(梅木秀徳)

一九九九年十月 N H K 出版発行
二七八ページ 三千元

オーレル・スタイン著／山口静一、
五代徹・訳／加藤久祚・解説

『砂に埋もれたホータンの廃墟』

スタインは三回にわたって中央アジアの探検を行ったが、本書はその第一次の探検について、一般向けに書かれた紀行である。したがって副題は「中国領トルキスタンの考古学的・地理学的探検旅行の私記」となっている。一般向けとはいえ、その内容は濃密かつ精緻を極めている。

本文のちょうど半分までが、スリナガルを出てパミールを越え、ホータンに至る行程、およびホータン南部の山岳地帯の探査行についての記述である。途次、行った有名なムスタグ・アタの試登についても、ここで詳しく述べられている。

後半ではホータンおよびその周辺地域での考古学的発掘調査の様子が描かれている。同書の完訳は今回が初めてで、しかも一九〇〇年五月にスリナガルを出発した日から約百年後に翻訳発刊されたことになる。同書には原書巻末に折り込まれている地図が、そのまま原寸、カラーで復

元添付されている。

過酷な山岳地帯の踏破を行った後、中央アジアの砂漠の中での困難を極める古代遺跡や文物の発掘を行い、驚くべき成果をあげ、またその発掘物をパミールを越えて西トルキスタンを横断し、ロンドンまで運んでゆくスタインの底なしのエネルギーにただただ圧倒される。(田村俊介)

一九九九年十二月 白水社発行
四四七十一ページ 写真図版一
二九葉 七千六百円

John Biggar 著

『THE ANDES』

— A Guide For Climbers —

一九九七年十一月号 (六三〇号) の本欄で紹介されたアンデス登山に関する唯一の充実した総合案内書『THE HIGH ANDES』の増補改訂版である。南アメリカのペネズエラから最南端のフエゴ島まで、百の六千メートル峰のすべてと百七十の六千メートル未満のピークについて八十三の地図を使って記述し、三十五枚のカラー写真と百二十以上のルート図をつけて解説している。

改訂版には、多くの五千メートル峰とパタゴニアの二章が新たに書き加えられた。資料的な面でもよく整理されているし、一般的な旅行案内

も簡潔に記されていて、ガイド・ブックとしての要件を完備している。

四十年前にアンデスを目指して、手探りで調査・研究した経験のある評者にとっては、本書は感慨深い。当時は二、三の単行本と『AA』、『Mountain World』しか情報源はなかったことを思うと、便利になったものである。

アンデスの魅力はアルプスとヒマラヤの中間にある、という見方や位置づけに私は与しない。アンデスの風土自体が素晴らしい吸引力をもつ土地である。この本を片手に南米に出かければ効率的に登山やトレッキングができること請け合いである。

本書の販売は英国はCordée、アメリカではAlpen Booksが扱っている。なお問い合わせはJ A C 図書室へ。

一九九九年 アンデス社(英) 発行
二五六ページ A5判 (中村保)

BERG 2000

Alpenvereinsjahrbuch Band
124

これは分類上「定期刊行物」つまり「雑誌」に属していて、事実タイトルにもその呼び名が見える。それにしては厚く、重く、そして美しい書物である。オーストリアとドイツ

と南ティロル(イタリア北部の旧オーストリア領)の三つの山岳会が合同で発行した「年報」であって、二千年紀の開幕を記念する号としての性格を与えようとの意気込みが本書から伝わってくる。ジルヴェッタ山群の特集記事は、文化史、絵画史にも及んで、登山を多角的な文化の中に位置づけようとする意思を感じさせる。以下、登山史と科学史を共通項に置いた山岳史、芸術と文化の側面から登山への動機づけを試みる章、そしてパタゴニア、ロッキーなどへの遠征の報告を並べた章が続く。基本的には通常の年報の性格を保っているけれども、三〇〇ページを超える大きな版型の書物に収める三〇〇余の写真と図版のほとんどが美しいカラーで刷られている。

万単位の会員を有する山岳会が、一方で高度な技術を要する登攀をバックアップすると同時に、大きな裾野を形成する登山好きの人々への山岳文化の啓蒙に力を注ぐ。過ぎ去ろうとしている世紀の回顧をも視野に入れて作られた年報は、見事な写真に加えて切手、版画、カリカチュアのたぐいを含めて、山岳をモチーフとする芸術文化の多様さを改めて感じさせてくれる。会報作りのモデルケースとしても役立ちそうだ。

(宮下啓三)

「山岳写真展」の作品を募集します

西暦2000年を記念して、本年度の年次晩餐会（12月2日開催予定）では全会員を対象にした山岳写真展を開催します。ふるってご応募ください。（山岳写真展運営委員会）

主 催	日本山岳会	*最近の作品に限る	に未採用の原版は写真展終了後本人に返却。
テ ー マ	「心に映る山々」(仮題)	応募点数	1人5点まで
応募期間	平成12年9月1～30日	選 考	日本山岳会フィルムビデオ委員長・羽田栄治、川嶋新太郎他
応募資格	JAC個人会員のみ	作品仕様	審査後まとめてプロラポにて半切りサイズ(35×40cm) 相当に仕上げる。展示サイズはマット抜き全紙サイズ
作品内容	国内外の山岳風景、四季の山、スキー、岩壁登攀、動植物、海外遠征登山（組写真は不可、1枚写真として未発表の作品に限る）	費 用	採用結果は本人に通知、1点につき制作費1万円本人負担（採用並びに未採用の原版は写真展終了後本人に返却。展示作品はすべての展示終了次第返却
提出原版	35mm判以上、ポジフィルム（ネガの場合は四つ切プリント添付）	巡 回 展	応募用紙の請求は日本山岳会事務局内「山岳写真展実行委員会」宛
		問 合 せ	晩餐会写真展終了後全作品を地方支部に巡回予定
			フィルムビデオ委員長・羽田栄治まで (TEL・03-3399-3975)

図書受入報告 (2000年1月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入別
自然環境研究センター (編)	大沼国定公園『大沼』(新・美しい自然公園 No.17)	48pp/34cm	自然公園美化管理財団	1999	発行者寄贈
神長幹雄	運命の雪稜：高峰に逝った友へのレクイエム	285pp/20cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
岡崎洋三	本多勝一の探検と冒険	366pp/20cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
三和史朗	消えゆく月に：三和裕信追悼集	183pp/22cm	中西出版	1999	出版社寄贈
野沢井歩 (編)	ネパール登山の手引き [第2版]	160pp/26cm	日本ヒマラヤ協会	2000	発行者寄贈
田口二郎	山の生涯 (下巻)：来し方 行く末	342pp/22cm	茗溪堂	1999	出版社寄贈
西丸震哉	西丸震哉の大警告！こんなものを食べていたのか (Play Books P-781)	198pp/18cm	青春出版社	2000	著者寄贈
JAC自然保護委員会 (編)	鳥海山南麓イヌワシ調査報告書 (1993-1997)	63pp/30cm	JAC自然保護委員会	1997	当会発行
JAC学生部 (編)	日中学生友好登山隊1999 雪宝頂 5,588m [報告書]	20pp/27cm	JAC学生部	1999	当会発行
中國登山協會・他 (編)	雪域神山：Immortal Mountains in the Snow Region	237pp/29cm	西藏人民出版社	1995	中國登山協會寄贈
筒井迪夫	森のひみつ：もっと知りたい人と森と木のこと	63pp/30cm	森林文化教育研究所	1998	上善峰男氏寄贈
筒井迪夫	森への憧憬 (第1集)：心に残るドイツの林学者たち	114pp/19cm	林野弘済会	2000	上善峰男氏寄贈
Bruce White (ed.)	New Zealand Alpine Journal 1999 (Vol. 51)	128pp/23cm	New Zealand A. C.	1999	発行者寄贈

会務報告

平成十二年二月理事会

日時 一月十二日 十八時三十分

二十時五十分

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 小倉、大森、竹内各副会長、西村、村井(龍)、森、宮崎、高原、勝山、村井(菱)、高遠、宮下、鯉坂、松原、増山、坂井、河西、山本、坂本各理事、神崎、中村各監事、平山、中川、田邊、吉永各常任評議員

〔委任〕 大塚会長、平野常任評議員

【審議事項】

一、「秩父宮記念山岳賞」実施大綱、実施細則の改正(竹内副会長)

平成十一年十二月十三日開催の運営、審査合同委員会において「秩父宮記念山岳賞」実施大綱、実施細則の改正案を検討し、別添えのとおりまとめたので、審議をお願いする。

〔改正の趣旨〕 本賞の実施後二年経過したが、より活性化を図るうえで今までの経験を活かす、より実態に即したものとしたい。

①運営委員会を廃止し、審査委員会だけとする。②表彰の対象分野を、登山活動においては幅広く、文化活動においても芸術色だけでなく、行動を広く範囲にとらえたものとする。

③個人応募を廃止し、すべて「推薦する」個人および団体とした。④推薦者は当期における審査委員はできないこととする。⑤業績の推薦は当年限りとする。ただし、再推薦は妨げない(現行二年)⑥理事会の意見を反映しやすくした。 承認

二、海外登山推薦状交付願(西村)

〔隊名〕 ダンプシユ・ピーク二〇〇

〇エグザナ隊(隊長・宮澤美渚子)

〔山名〕 ネパール王国ダウラギリ山

群ダンブシユ・ピーク

〔時期〕 二〇〇〇年春期 承認

三、スイスアルプス博物館寄託の横有恒氏遺品三件の寄託先変更(鯉坂)

スイスアルプス博物館の閉館(二〇〇〇年二月予定)により、寄託先を大田市立山岳博物館に変更したい。

三件の内訳は、門田ビッケル(備品No.二六八)、鋳皮登山靴(No.六五四)、皮製チョッキ(No.二六八) 承認

【報告事項】

一、ホームページなどにかかわる問題点と対応策のため検討会(世話役・森)を二回開催し、中間報告(別紙)をまとめた。以下の意見があった。

●広報活動の一環としてやっていく必要がある(田邊)

●将来的には広い意味での広報が必要となる。当面はインターネットの範囲で進めては(鯉坂)

さんけんだより 今年の企画を お知らせします

山研運営委員会

で十一年度を終える結果となつてしましました。

運営委員会は次のような企画で今年度もがんばりますので、ご利用よろしく願います。

平成十二年度

開所 四月二十九日

開所 十月二十八日

開所から五月六日までの利用申し込みは四月一日から受け付けます。この間の申込は事務局へ。五月七日以降の利用予約は直接山研にご連絡ください。

平成十二年度企画

●新会員のためのウェストン祭

六月三、四日

●山のスケッチ展とスケッチ教室

六月中旬〜七月末日

●山岳写真展と写真教室

九月上旬〜十月上旬

●プチ・オータム・コンサート

「弦楽四重奏の夕べ」

九月二十三、二十四日

●ミニ水力発電見学と焼岳登山

十月十四、十五日

●ホームページのアクセスは会員外からも多いが、対応に会員と区別の必要はないか(高原)

●サービスにも限度があるので、インターネット導入の目的が何だったのかを考えなければ(吉永)

●小委員会組織で、総務委員会のもとにということだが、内容的には並列と考える(西村)

●事務局の対応能力にも限度がある。職務分担を見直す(西村)

●ヒマラヤ登山に関するデータベース

ス化は他の山岳団体でも必要とし、期待されている(大森、神崎、坂井)

二、支部行事参加報告(竹内、森)

●山陰支部晩餐会(十二月十四、十五日、竹内副会長、谷川青年部委員参加)

●山梨支部新年会(二月八日、大塚会長、森参加)

【委員会報告】

ミニ水力発電計画実行委員会・坂本

①昨年十一月試運転。今年五月中旬本格稼働の予定。データの採取計画を考えている。

②水力発電機のジーエス技術サービス(株)のパンフに今回の事業が写真掲載されている。採算を度外視して協力してくれたこともあり、掲載を了承した。

総務委員会・西村、高原

①団体傷害保険の平成十二年度募集について取扱店より案内があった。昨年は事故支払い金額が前年より百七十万円くらい多く、割引率が五パーセント下がり二五パーセントとなった。

②支部事務局担当者会議を二月二十六、二十七日開催予定。関係者の出席および連絡事項などの報告をお願いする。

集委員会・勝山

①新春スキー大会を一月七日より十

日まで志賀高原で開催、三十八名参加。ピーコン講習などもとり入れ内容をあつくした。

会報委員会・村井(葵)

①一月号は大塚会長の特別寄稿、晩餐会報告など。

百年史委員会・高遠

①資料集めを行っている。

指導委員会・松原

①一月三十日より二月一日まで、八ヶ岳でアイスクライミング講習会を開催予定。

海外連絡委員会・増山、中村

①カナダ山岳会会長来日。一月九日当集会室でアルバータ二〇〇〇実行委員会メンバーと打ち合わせを行った。

②AAJ編集長クリスチャン・ベックウイズ氏(アメリカ山岳会会長より大塚会長へ紹介状あり)が二月十三日来日する。翌十四日講演会を予定している。

医療委員会・増山

①文部省登山研修所での低酸素室滞在実験を当会の事業として実施したことが、十二月二十三日付朝日新聞に掲載された。

②一月二十一日十八時三十分より当集会室で講演会を予定。演題「ムスタン・ローマンタンにおける新しい診療所の立ち上げ」(原田てる子氏)「ピラミッドの麓の二年

間(萩原理江氏)

自然保護委員会・河西

①同委員会発行「木の目草の芽」十一、十二月号(三八号)の紹介。

財務委員会・村井(龍)

①月次報告および今年度の予算実施状況について、各委員会ヒヤリング。一月末までに清算状況を報告してもらいたい。

②来年度の予算(とくに新規行事等を計画している委員会)計画を一月末までに報告してもらいたい。

その他

①NHKビデオ「日本映像の二十世紀」への資料(冠松次郎氏に関するもの)二次使用の許可願いを承諾。西村

②一月二十五日、中国登山協会歓迎会を開催する。坂井

■会員異動

物故

山岡 保(一一三三八)	99・10・11
加藤春夫(二〇二八九)	99・11・10
遠藤明男(五五一二)	99・11・21
増江俊三(六三三四)	00・1・2
加治甚吾(二五九三)	00・1・13
武田満子(六〇四三)	00・1・15
退会(二〇〇〇年一月)	
利部伸三(二二七一五)	
沼田 眞(九一〇五)	
安齋正明(四三八一)	

近藤克二(九一一三)
栗岡 豊(七三六八)

終身会員

中村武雄(二〇五四七)

◆編集後記◆

登山装備と用具の進化は日進月歩で目を見張るものがあります。マロリーの時代とは雲泥の差で、高峰登山にも多大な貢献をしています。今号は最新の登山用具の選び方、使い方を特集しました。多様化、複雑化の中で、国内外のそれぞれの対象の山に合致した適切な装備の調達は、登山術のひとつと認識したいほどです。進化はまた山スキーや登攀用具の領域でも顕著です。

ただ、当たり前のことですが、道具や装備が山登りするわけではなく、主役はあくまでも生身の登山者です。道具や装備は補助的な脇役に過ぎないことを十分わきまえておきたいと考えます。

(村井葵)

日本山岳会会報 山 658号

2000年(平成12年)3月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 大塚博美

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社